

玖津礼郷土誌

工藤 浄真

はじめに

昨年度までは、利尻島に於ける「民間信仰」を取り上げ、各分野に亘って研究調査の結果を報告してきた。本年度は視点を変更して、各部落誌としての調査研究し、久連、「玖津礼」について報告するものである。資料不足と共に聞き取り調査の限界があって、調査不足と未了があって、今後の課題は大きい。

特に移住開拓の年代の調査には不可能な状況が多く、「推定」という判断の域を出ない。

だが、他部落にはない、来住経路とその事情漁民経済の実態のある事が判明した。

何れにしても、久連住民の生活状況の詳細調査は困難が多く概略を知る程度である。

あらまし

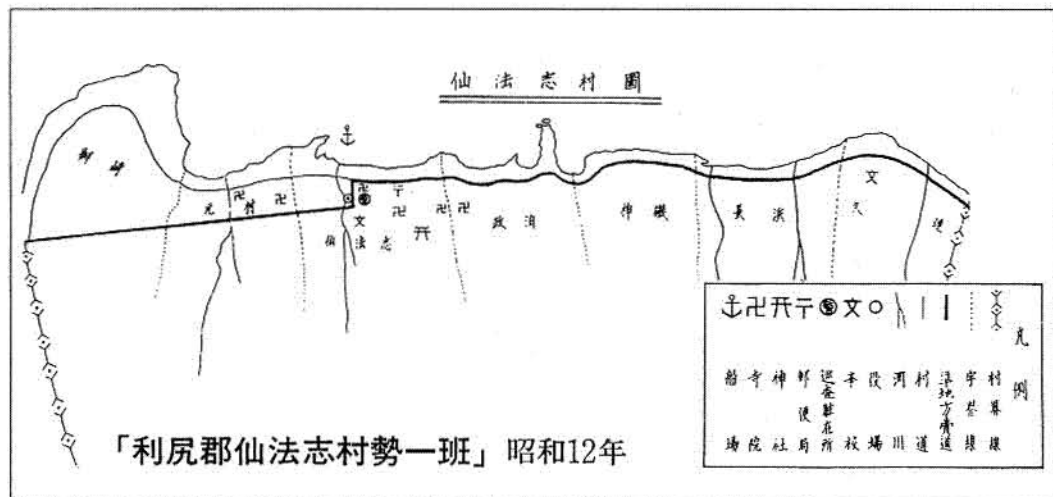
久連は旧仙法志村内部部落で西端にあって、旧杓形村蘭泊に接している集落である。

杓形地域の居住者との交流が多く、同一生活圏内に今も昔も入っている。

それは距離的に近いばかりでなく、久連への来住の経過地点と杓形からの来住者が多い事から心情的な関連性が強く現在もそうである。また、久連からの転出者も比較的杓形に多い点もあげられる。

更に、全島的に言える事であるが、現在の漁民の労働は年間を通じて漁業以外の仕事に従事し、土木建設、建築関係へ仕事に臨時賃金労働者が殆どで、冬期間に漁業に携り沖に出漁する漁夫は久連の場合は全くない。

また、出稼者も多く、冬の6ヶ月間の家庭を留守にする世帯主も多く、20数年間続いており今後も続くものと考えられる。



1. 地 域

(1) 地名と地形並びに気象

久連の地名の由来ははっきりしていないが大久連のホマ場所の絶壁状の20米程の漸崖の傾斜地から絶えず土石が崩れ落ちている事から自然に地名と用いられ定着したようである。

利尻町内的にはやゝ中間的位置に当り、仙法志地区内各部落にはない地形で、隣接する蘭泊に類似しており、東隣の長浜部落よりも顕著である。

公には、大正6年より現在の久連部落が長浜より分離した部落になったものである。それ以前はシサンベツと呼ばれ、長浜、久連両部落を指していた。俗に久連と言うのは、「大久連」をさしていたが後に公称となった。

気象状況は、気温、風向等は町内殆ど変わらないが、地形と地域の方角が、特に冬期間は温暖なる好条件となっている。

地形は東端は平地と小丘になって、学校所在周辺は丘陵と傾斜地でその西側が学校の沢となって、西側坂道あたりから旧村界までを大久連と言われた所である。

まず、穴間で岩石群が約20米の長さに亘る景勝の地である穴間から旧村界までは、海浜より狭い所で5、6米、広い所で10米程で陸地が屏風状の断崖になっていて、4つの沢がある。

西側坂が地先になっていて、「藪の崎」続いて、「幸助の潤」その陸地が「幸助の沢」で穴間の東側である。

次は「桶谷の沢」で続いて、「堀の沢」でホマ場所の東側にある。また西側に「北辻の沢」もあって穴間と各沢には民家があったが現在はない。穴間の西隣の浜は「平田の潤」で他は久連全体石浜で、陸と浜も漁民にとっては条件は悪い。樹木は全くなく、昔の乱伐により植林も行われたが成功しなかった。

(2) 移 住

開拓移住の最初年代は明治22年と推定される。その根拠として次の事があげられる。

- ① 久連小学校沿革史の中の進歩会結成の記事からである。これは会員18名を以て明治25年に教育所開設を目的とした。
- ② 旧仙法志村行政資料中には、明治21年の9戸から、同24年の70戸258人、同25年の81戸345人の記録が残っている。明治21年には久連には居住者がなかった。
- ③ 昭和36年の利尻町教育研究会社会料部会の研究調査資料によると、久連地区の居住年数中で、81年以上が1%、71年以上80年が15%になっている。
- ④ 現居住の大山氏は先代善太郎が桶谷氏を頼って、明治23年に当地に石川県より来住した伝えている。

当時としては居住者の実態把握の困難があったことも考えられる。

移住者の来島のルートは鴛泊→沓形→現在地、即ち大久連と学校周辺の居住者である。鬼脇→メヌショロ→御崎→現在地、即ち久連の東部の集落で2つの来住経路に別れている。

先祖の出身県別にみると、秋田20%、青森10%、鳥取、福井の8%及至9%、石川7%、新潟、山形の4%、岩手2%、他、千葉、茨木、愛媛、富山、広島約1%程度で宮城3%であって、富山の少ない事に目がつく。

御崎から現在地への再移住は明治30年代後半から40年代で、未開地の有望な場としての事である。明治31年6月16日山火による山林焼失し、燃料としての樹木に目を付けた事も移住の原因にあげられている。

大正未から昭和10年代にかけて久連からの転出者は樺太に渡った人が多く、道内本州は少ない。戦後の転出者、稚内、札幌方面で沓形に住居を移した人も多い。何れも原因は漁不振によるもので、典型的な過疎地である。

(3) 1年の暮し

開拓移住して来た人々は皆漁師ではなかったが、全員が何らかの形で鯨漁場で働いた。

①春、(4月より6月)

久連には二か所の鯨漁場があった。即ち平田漁場と加藤漁場であるが、住民の殆どが漁師であってもなくても、手間取り漁師として働き生計を立てていたのである。

その合い間を見てはホマ拾い、カズノコ拾いをし、ホマは肥料の粕か、自給自足の畑作物の自家肥料とした。

②夏 (6月より9月)

鯨作業の終らない中に、手間取り漁民は畑作業に取りかかる、ジャガイモ、カボチャ、キャベツ、豆類等の種蒔が始まる。

それは6月のお祭り前に終わる、鯨製品の仕事も一段落した処でお祭りとなる。その後、女の人達は畠の手入れ、男の人は鯨場の後仕未や昆布取りの準備に取りかかる。他の漁師でない男の人達は各々自分の生業に戻る。海が時化ると昆布拾いもした。

7月中頃か20日から昆布の採取期に入り、昼夜昆布取りに身心が集中する。女の人達は7月の「土用」中に暇を見ては畑作物の手入れや「大根蒔き」する。

昆布取りは9月1杯続き、これが終ると畑作物の取り入れ作業でまた忙しくなる。

ウニは昆布の害虫と言われて昭和35年まで誰も取らなかったし、とって自分達食用か土産にする程度であった。

③秋 (9月より10月)

畑物の取り入れと、昆布の製品作業や出荷作業が始まってその成果に心をときめかせる。そして冬越しの食料準備が完了する。また、天草取りもしたようだが久連は余り、取らなかったようである。

④冬 (11月より3月)

この時季は「アワビ」取りが始まるのだが、久連ではこの話が余りない。

久連の半数近い人々は本来から漁師ではなく、「木曳」「大工」「石屋」などさまざまで、冬期間中は余る程あった山林の伐り出し作業に当たったという。現在野原になっているのは明治の移住の時より大正年代にかけて、乱伐して、礼文に売る程も伐り出した為だと言われている。

しかしまた、冬期間中は手間取り漁師達は、またくる春、鯨漁の準備も余りなく、賭博的な遊びをして過したと言う。

住居する家屋は全く粗末なもので、石屋根葺屋で窓は一重で冬は雪が入り、暖かいのは身体の前だけで後は何時もスースー寒く、昼食はジャガイモの塩煮と鯨漬けであった。殆どが普通の事であった。

冬の御地走は何よりも「火」だと最近まで言われていた。

1年の暮しのあらましは以上で、間違っている部分があってもそれ程の大差はない。

昭和に入って

大正13年になって電灯がつきランプ生活に別れを告げたが明るさは、ランプとそれ程変わらず、また、電灯をつけられない家庭もあった。

昭和3年になって初めてバスが走ったが、5・6人、不定時、停留所なしでなおも、用足しは夏も冬も徒歩だけで、殆ど杓形まで半日がかりで、日常生活をした。夏の海の風の時は磯船も使った。従って殆どが男の人達が外に出て歩くのが当然であった。

戦後、昭和27年になって、現在の宗谷バスが運行されて、久連には二か所のバス停が設けられて便利となり、同10月は今までなかった電話が共同であったが設置されて、祝賀会を久連小学校で開いた。それ程嬉しい出来事であったのである。同じく51年に自動化されて殆ど全戸に電話が普及し、生活を変えた。

タクシーが走るようになったのが同じ38年、電灯も明るくなり、テレビや電気器具も流行し、35年頃からの小規模水道の普及から、町有水道が全戸に布設されて、「水汲み」から解放された。

ランプのホヤみがき、ジャガイモの皮むき、水汲は、子供達の日常定められていた日課であった時代は過ぎたのである。

水汲みしても、井戸が5か所よりなく、1か所の井戸から20軒前後の家庭の水を賄っていた。

一方生産物手段も大きく変化し、「ウニ」「昆布」の養殖産業となったが、久連の漁民はウニのみであるがその影響を受けてる。

出稼ぎはどれも同じで久連も例外でなく、冬期間の約半年間父親のいない家庭生活が続いて20数年になる。

車の普及もまた、杓形、仙法志の各市街から離れている久連の住民の生活を変えている。

(4) 道路 (交通)

久連地区内には2か所の危険な道路状態があった。穴間とホマ場である。

穴間は岩石群で5、6米の高さのもので約20米の長さで、直ちに屏風状断崖であった為に通行には困難を極め、明治の開村時よりの県案であった。一応は明治34年、明治42年道路改良工事が行われたがその危険性は変わらなかった。

ホマ場においては海浜より直ちに20米以上の断崖状の地形で、しかも土石が絶えず崩落する為に危険で、利尻山登山道の「親知らず子知らず」の状態であった。何れの箇所も現在のようになったのは昭和47年以後の事である。

従って久連の住民は徒歩か、また夏期の凧の時の船で沓形に出て用件を足した。仙法志へは行政上、経済上の役場、漁組への公の用件のみで、昭和27年まで続いた。

島内陸上では、バスの運行、ハイヤーの営業、乗用車の普及によって交通は近代化された。それもまた、道路の改良工事、昭和50年以降舗装工事が進み、道々、町道の殆どが舗装道路となり、冬期間の除雪体制も整って、久連の不便さも解消されて自由に往来が可能になった。

海上航路、明治18年の汽船運航の開始、明治36年の小樽の藤山汽船の寄港による回漕店の創設、昭和11年の稚内からの三角航路の実現、昭和23年の社線仙法志駅の開設、昭和45年のフェリーの就航等の何れも、久連住民に於いては、今も昔も、それ程の便宜はなく、沓形或は鵜泊の各港まで出なくてはならない。エアータクシーに於いても同様である。

(5) 治安及び医療

治安に於ては仙法志警察官駐在所の所管下の元であり現在も変わっていない。しかし、大正12年から大正14年まで、仙台出身で辻本弥一郎という巡査官が、久連590番地、即久連小学校近くに派出所がおかれている。請願による派出所のようである。地域の住民とよく交流のあった警察官として知られている。

医療においては移住の初めより、沓形市街の病院医師に依って診療が行われていた。大正10年3月より、個人開業医として、現自治会館の位置に会館を借用して、西村清、斉藤実則、木庭泰蔵、同泰亮の医師が常住し久連住民の診療に当たっている。期間は昭和5年までの約10年間で、木庭両氏は親子で仙法志にも開業していた。

しかし、その前後も沓形の在住する医師による診療が仙法志診療所、それ以前の村医によるよりも依存度が多かった。

2 産 業

(1) 漁 業

久連部落は全体の95%迄が漁業を営み、漁業の歴史そのものが開拓の歴史である。どの部落も当初は鯨建網定置漁場への手間取り漁夫であった。一定置漁夫30人前後の入り稼ぎ漁夫の他に地元の漁夫により労働力が供給されたものである。

即ち、入り稼ぎ漁夫は沖に出漁し、鯨漁業に実際に就労し、手間取り漁夫は、沖から浜まで運搬、鯨の加工その他に携わったもので、これが漁業者全体90%以上の人達である。期間は毎年4月より6月までの3か月間で賃金労働者であった。

特にこの部落は定置建網業者への依存度の高い所であった。僅かに自営差網漁業者は5、6軒程度であり本当の令細漁民といってよい。

特に昆布取りは殆どの漁業者が漁をしていたが、天草など少々採取する程度であったようである。

明治20年代初めに村界近くに高木繁松氏の漁場があり、後に穴間近くに26年頃に加藤幸助氏の開拓した漁場と、明治31年に鬼脇から来て漁場を開いた平田豊作氏があって、この3者の鯨漁場で稼ぎ生活をしてきたようである。

後に高木氏は明治40年頃に久連の漁場を廃止し消滅したが、平田氏はその後久連内だけでも4か銃経営し、加藤氏の両漁場の手間取り漁夫であった。

手間取りと言っても、帳場（会計）丘回り（監督）鯨かつぎ、鯨つぶし、鯨さき、飯場、明治から大正にかけては鯨粕主体であったから、釜焚き、粕干、等等様々であったし、生活をして行く為の経済力は殆ど漁場主が握っていた。

網オロシから切り上げまでは、実に多くの種類の仕事や製造工程があって現在では想像できない。鱈釣業者はなかった。昭和30年以後鯨郡来が皆無になって昆布の生産に重点がおかれ、それ以後、ウニの増養殖に重点がおかれている。

同35年頃より、鯨漁に変わって鮫漁も盛んになったが、操業していた一業者も昨年着業を中止し、他の鮫漁船に歩方として就労している人が若干いる程度である。

スケソウ鱈漁業も一時1月より3月まで行われたが薄漁で長続きせず、2、3の着業者がいたが間もなく操業を止めた。

従って現在の漁業者は、昆布とウニ漁業に従事し、他の期間は土木建築関係の賃金稼ぎをしている。「アワビ」漁がなく、「ワカメ」天草は商品価値がなくなり生産されていない。

(2) 農業とその他の産業

自給自足を目的とした、野菜栽培が開拓移住当時から行われていた。ジャガイモ、大根、キャベツ、豆類、カボチャ、人参など殆どの野菜作物ができ、ジャガイモの生産量が多く、冬期間の昼食の主食とした。一戸平均にして「カマス」百俵前後の収穫があった。利尻の米とも言われ、カボチャと合わせ重要な食料品であった。

これは戦前戦後を通じ、昭和40年頃まで続けられたが、それ以後現在は殆ど畑作物はなされていない。また、明治後半から大正にかけての不漁時代には副業が奨励されて、当仙法志村では、20数戸の養蚕業者がいたがあくまで副業で、久連でも1、2戸着業していたが成功しなかった。

畜産に於ては、戦後の食料難時代、綿羊、豚、鶏の飼育が進められ、どこの家庭でも、これらの家畜が何頭か飼われていたが昭和35、6年には皆無となった。

森林も豊富であったが乱伐とその塩害によって野原になってしまい、大正年代植林を盛んに実施

したが育たなかった。

沃度の製造業者が旧仙法志村に5人程いたが、これは明治後半から大正10年頃まで、鴛泊間住来していた、沢山久太郎、後に岡島春正、松下米造氏いたがその後跡絶えた。戦時中に小学校では戦争協力体制で児童と共に一時的に製造したことがあった程度である。

その他の産業はこの地にはなかった。

(3) 商 業

大正5年当時大久連では、「そばや」安藤源蔵、(村界より4戸目)、斉藤氏、「呉服屋」荒谷光太郎氏が営業し、その隣の現在大沢の先祖の「豆腐屋」浜本岩吉氏の後の益田直平氏の「荒物雑貨店」があって益田商店は現在も続いている。

それからやや離れた浜側に、「荒物雑貨店」で仲買商もしていた、原崎竹二郎氏、現在の本町原崎の先祖や、その向いの質屋久保田広吉氏があり、沃土工場に関係していた岡島春正、松下光造両者があり、各種商人5軒があった。

学校周辺では、「文房具店」の三安德太郎氏後の山本与太郎商店が学校の向い、また西坂道中間に、「雑貨店」の中川寅吉があった。更に学校周辺には鉄板屋もあったようであり、小屋勘蔵氏は水産物仲買商をしていた。

その後、原崎商店は東京へ、そしてまもなく本町(マオヤニ)へ、岡島、松下両氏は鴛泊へ、安藤、荒谷氏も大正末期に店を閉じ、大沢氏も廃業し、戦後一時再開したがまもなく取止めた。久保田質店もその後間もなく閉店している。

上田精治氏は戦中戦後に雑貨商を営んだが十数年間で店を閉じ、杢形に移り、機船漁業を開始し、現在で久連全体中、唯一か所家業を続けている店は益田氏だけである。

中川寅吉氏の子、弥一郎は戦後店を閉じ、鯉建網経営に乗り出し廃業した。近くの大山甚松氏は漁業協同組合購売部の委託店として、現在雑貨品を取扱っている。更に大正10年頃に何年も開業していなかったと言われているが、山中理髪店もあった。山中忠治氏である。

大工、石工もいたが、専門的に年間着業していたのではなく、多く漁師と同じような仕事を日常続けてた。袋澗、墓碑作りであったようだ。また、旅人宿のようなものを開業した人もおったようであるが、何れも大正10年頃の事であった。

3 行政組織

(1) 呼称の変更と部落組織

現在の部落、「久連」は、旧仙法志村開村の明治35年当時は、仙法志村字シサンベツ、(第6部)と公称されていた。しかし、実際には開村以前より、玖津礼、または、「クツレ」と書き呼称されていたのも事実である。それはどの地域を指していたかと言うと、旧久連小学校の西坂より穴間から、旧杢形村ランドマリ、即ち村界の橋までの約1.5軒の範囲内を表し、更に久連は現在の大久連を中心として呼んでいたものである。

従って、現在の長浜と久連をシサンベツ、（至山別）として行政上の組織内におかれていたのである。それが開村以来、人口の増加と永住者の増加と相まって、広範囲に亘るシサンベツは行政上ばかりでなく、他の事情から不便となり、支障が生じてきた為に、大正5年に12月に長浜と久連に分割して、第7部を新しく設け久連としたものである。

その時に普段、地域住民がシサンベツと呼ばれていた、旧久連小学校の周辺一帯を久連に編入し組織したのが現在の部落久連になって今日に至っている。

村政資料の中に次の記録が残っている。

議案第7号

部長規則中政区の件

本村部長規則中、名称、区域ヲ左記ノ通り改正ス

名 称

第6部 仙法志村シサンベツノ内長浜

第7部 “ “ノ内久連

大正5年12月12日提出

“ “年12月 日議決

仙法志村長 赤岡清吉

また、仙法志村50年史考には、第6部長平田豊作、大正6年には第6部長服部安太郎、第7部長平田豊作、「分離した」とある。

更に、旧久連小学校周辺一帯がシサンベツ内にある事実として、次の村政資料がある。

議案 第3号

土地無償付与出願ノ件

利尻郡仙法志村字シサンベツ

久 連 校

1. 未開地 8町式反歩 内訳敷地1町2反歩

樹裁地5町歩

実習地2町歩

(生徒3百人の予定)

右官林解除ノ上ハ教育費基本財産トシテ無

償付与出願スルモノトス

大正5年8月21日提出

仙法志村長 赤岡清吉

従って、行政組織上からは、大正5年まではシサンベツ内であって、前記平田氏第6部長、以後第7部長に変わって昭和3年から第7区長と呼称が変わり、昭和14年までの53年間続いてその職務にあった事になる。

昭和15年より部落会長名に変更され、佐藤弥五郎氏が就任、（昭和22年より自治会）

昭和17年より昭和21年 正座正吉氏
昭和22年より一期2年間 益田岸太氏
昭和24年の1年間 (代理) 疋瀬 綴氏
昭和25年の1年間 楢山仁三郎氏
昭和26年より一期2年間 久保田広市氏
昭和28年より一期2年間 藤田長利氏
昭和30年より一期2年間 古谷円五郎氏
昭和32年より一期2年間 岡田善次郎氏
昭和34年より三期6年間 久保田広市氏
昭和40年より八期16年間 藤田長利氏
昭和56年10月より61年の5年間 岡田一雄氏
その後現在 川原 理氏

明治の開村時より平田氏死亡し改選されまでは、全面的にその権限は同氏が掌握していたし、また地域住民の信望も厚かった。地元漁夫を合すると数百人の漁場の長たる貫録を示していた。

また、同地区内の鯿漁場を経営する、加藤幸助氏、更に、明治40年頃居住していた剣士でもあった鯿建網業者の高木繁松、地域開拓に熱意を示した山上平七の氏名等に依って事実上明治より大正、そして昭和に入るまでの間、運営されたと言ってもよい程であった。

平田、加藤の両氏は、村議、学務員でもあって、この両者に久連の行政が委ねられていたものである。

部落内の行政組織が最も緊密化し、戦時体制の強化による施策として、完全制度化されたのが昭和10年代より戦後時至る昭和20年までの事である。

昭和17年の久連部落の組織をみると、

昭和17年12月31日選任

久連部落会長	正座 正吉
総務部長兼教化部長	大山 甚松
産業経済部長	中川弥一郎
警防部長	岡田善次郎
衛生部長兼森林防火部長	北辻与惣松
統後奉公部長	楢山仁三郎
経理部長	門田 真一

隣保班

第1班長	中島 宝作
第2 " "	中川 弥一郎
第3 " "	山崎初太郎
第4 " "	阿部善太郎

第5 " " 岡田善次郎

第6 " " 益田 岸太

この頃は毎年のように組織変更の実施されている事も記しておきたい。即し、昭和18年12月31日選任をみると、

部落会長 正座 正吉

総務部長 上田 精治

教化部長 山崎時二郎

納税会計部長 門田 市蔵

産業経済部長 大山 甚松

警防部長 古谷円五郎

健民部長 岡田善次郎

森林防火部長 北辻与惣松

社会部並に銃後奉公部長 小玉源一郎

婦人部長 佐藤 リエ

第1 隣保班長 古谷円五郎

第2 " " 小平 正蔵

第3 " " 檜山仁三郎

第4 " " 阿部善太郎

第5 " " 山上時二郎

第6 " " 加島 政蔵

このように、新しく、納税、健民、社会、婦人の各部を設けている。

特に、青年団分団長、神社委員、漁組役員等が部落会内にあつて、国家統一の完全なる遂行する為に普通では考えられない統制国家制度上から来る例外的なものである。

また、簡選ではあるが部落内の村会議員の影響力が大きかったのである。

昭和20年当初における久連部落の歳出予算を見ると次のようになっている。

1. 常会費 195円

1. 会議費 85円 班長並に役員会議費
2. 会場費 10円 会館地代金
3. 需要費 120円 木炭4俵28円、石炭10円、会館修理費

2. 事務費 437円 雑費筆墨、電気料

1. 手当 60円 会長50円、使丁10円
2. 使丁給料 300円 年俸給料
3. 需要費 57円 (判続不明)

3. 事業費 210円

1. 教化費 30円 餞別(応招兵)

2. 産業費 35円 購入費並に人夫負担
 3. 警防費 75円 木炭及役員待遇費
 4. 衛生費 50円 春秋衛生検査費15円、健民大会35円
 5. 森林防火費 20円 造林夫賃金他
 6. 防火市内電灯
4. 部落会負担金 820円
1. 銃後奉公会 95円 仙法志銃後奉公会負担金
 2. 保護会 60円 久連国民学校保護会負担金
 3. 青年学校 仙法志青年学校
 4. 後援会 60円 稚内監視隊後援会
 5. 警防後援会費 120円 仙法志警防後援
 6. 氏子負担金 仙法志神社負担金
 7. 諸会団後援費 20円 その他の諸会団
 8. 監視哨漁期交代費 100円 鯨漁期交代負担金
5. 講習会費 10円
1. 雑費 10円 講習会補助その他
6. 雑支出 20円
7. 積立金 50円
8. 予備金 50円
- 合計 1,600円

現在の当部落内組織をあげて掲げてみると、

会 長 川原 理
副 会 長 喜多 亮
会計書記 “ ”
会計監査 “ ”
第1班長 加藤 政市
第2班長 大山 光男
第3班長 小屋ヨシ子
第4班長 佐藤 春吉
第5班長 木村 政男
第6班長 北村 重松

(2) 部落内公職者

部落内住民の意向意見が村政並町政上にどのように反影し、実施されるかはまた、部落内から出ている村並に町の行政の役職員、また漁業協同組合役職員の影響力が大きかった。

久連出身村会並町会議員

平田 豊作氏 開村時より明治36年

加藤 幸助氏 開村時より明治36年

平田 豊作氏 明治37年より38年

平田 豊作氏 同39年より44年迄

加藤 幸助氏 上に同じ

加藤 幸助氏 同45年より大正2年迄

平田 豊作氏 同3年より昭和6年迄

加藤 幸助氏 同3年より大正14年迄

原崎作次郎氏 昭和3年より同6年迄

小屋勘 蔵氏 昭和7年より同10年迄

正座 正吉氏 昭和12年5月より昭和21年迄

平田 豊作氏 昭和13年～14年9月迄

上田 精治氏 同15年より21年迄

昭和22年4月30日、地方自治法執行による定員16名の直接選挙により、

中川弥一郎 25年迄の1期と30年より32年迄

益田 岸太 22年より1期間、4年間

山上時二郎 同38年5月まで4期間

北村 重雄 同41年より2期間8年間

岡田 一雄 同61年より現在

仙法志消防組としては、

組頭 山岸国太郎 昭和7年より10年迄

昭和23年民生児童委員法施行による委員

上田 精治 昭和25年迄の1期3年間

橋山仁三郎 右年より同31年迄の2期

山上ハギノ 昭和26年迄の1期間

中川弥一郎 昭和30年より同43年迄

門田 真一 昭和44年より3期間

益田 久子 昭和53年より現在

また、昭和23年農業委員会法施行による農業委員は、

中川弥一郎 昭和27年迄の1期間

大山 甚松 右年より現在

山上時二郎 右年より1期間

更に消防委員会法による委員には、

中川弥一郎 昭和30年より1期間

・公平委員会法に委員

山崎時二郎 昭和44年より1期間

・選挙管理委員会法による委員また委員長

久保田広市 昭和43年より3期

久保田広市 昭和55年より1期4年間

仙法志漁業協同組合、水産組合役員

同組組合 平田豊作 当初よりの明治44年より昭和14年9月まで理事、組合長を務める。また、大正2年発足の水産組合の理事並に組合長を歴任している。

右に同じく、評議委員並に理事役員として、大正13年まで、加藤幸助との両氏がいた。

戦後の同組合の理事としては

正座正吉、大山甚松、北辻一郎、岡田一雄、川原理（現在）の各氏らで、草間金吾氏が監査を務めた事がある。

その他現在の各団体役員は次のようである。

仙法志体育協会副会長 岡田 一雄

〃水勤救済会組長 木村 忠男

〃森林組合組合長 藤田 武利

他に体協普通役員に、根上春男、木村忠男、須藤幹男の諸氏があり、水難救済会看守には楢山志年氏である。

仙法志神社総代には喜多金助氏、また、納税貯蓄組合組合長は須藤順一、木村正男である。

(3) 人口の変化

当部落の人口動態をみると、常に旧仙法志村総人口数の約15%前後、（寄留、本籍人を含む）で経過している。

最初の居住年代は明治22年以後と考えられる。それは各資料をみるに明治21年の旧仙法志村の総人口数は島内各村に比較し

年次	仙法志村		沓形村		鴛泊村		鬼脇村	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
明治21年	9	126	53	349	186	1,141	202	1,113
24	70	258	104	779	258	2,285	305	1,579
25	81	345						

て最も少なく、九戸126人で 表1. 明治20年前半における利尻島戸数調べ

久連部落地域の居住者はまだなかったようである。

明治24年になって旧仙法志村の戸数人口が70戸258人となっている。また、当部落へ来住者は旧鴛泊村、沓形村経由した者が多く、移動もまた激しく、戸長役場所在地までの距離も遠く、道路のない状態であった事を考え合せると、その実態の把握の困難を極めたものと言える。

今は調査し判明分のみの人口の変化について記述する。

大正5年12月未行政組織上、シユサンベツが、第6部、第7部分割されて、長浜、久連となったが、これ以来旧仙法志村7部落中大正5年から大正10年に亘って久連は戸口人口は（マオヤニを除く）最も多かったが、鯨漁の好況により、一村全体も同様であるが当部落の居住者の転出移動が激しく、現在では人口に於てかつての4分の1以下に現在減少し過疎化が続いている。

年次	仙法志村		久連地区	
	戸数	人口	戸数	人口
大正5年	670		110	
10	630		103	
昭和10年	494	3,035	69	436
13	493	3,118	63	421
19	444	2,668	56	354
25	526	3,523	65	458
30	526	3,492	69	428
35	560	3,035	69	464
40				
46	448	1,678	56	234
56	403	1,222	43	115
63	382	1,044	39	112

表2. 仙法志地区戸口推移

4. 部落内団体組織

(1) 青年会

管内的にも旧仙法志村内青年団体組織が比較的早かった。中でも、ペウタンケウシ（神磯）は、仙法志第五共成組組織されたのが明治38年12月8日で、仙法志中最初の青年会の発足を見ている。各部落の青年会組織は明治42年から大正元年来の間に発足している。

久連青年会は明治42年10月8日の発足となっており、大久連地域内の青年会組織であったが、大正元年12月に至り、シサンベツ一円、（長浜、久連）の青年会組織となり、大正団と呼称し、それまでであった久連青年会は支部とした。

後大正5年に至り、シサンベツは長浜と久連との二部に分割独立した事に依って、大正5年に至り、青年会も分離独立したが一部はそのまま大正団内の組織中にあった。

それは、地域的状況から消防防火の必要性を感じ、厚誠団なる青年消防団を結成したのである。団員38名を以て消防器具を購入準備し、団旗も作り士気揚々たるものがあつた。所謂私設消防団の編成であった。

久保田広市氏、（昭和62年1月作成）記録によると役員は次のようになっている。

厚誠団役員

団長 鎌田市太郎
 副団長 大沢 寅吉、根上 茂吉
 理事幹事 不 明
 会 計 久保田広吉
 機械器具管理者 川井 善吉
 団体旗手 竹中和八郎

名目上、大正団に包括された一団体であり大正団団長は、平田金二氏であった。

団員は次のようになっている。

吉田 健美、松井 市松、大石又五郎、荒谷光太郎、荒谷 久治、大沢 寅吉、加島 仙市、益田 岸太、鎌田市太郎、上田 精治、根上 茂吉、久保田広吉、木村福太郎、川井 善吉、

北辻与惣松、村上慶次郎、松下 米造、岡島 春正、竹石 運吉、山上 石造、堀 豊太、堀 敬吾、竹中和八郎、越前 峯吉、三上 由造、高杉 金助、根上 茂作、木村 島蔵、小杉喜代治、齊藤清三郎、木村 政吉、木村千代治、桶谷 漁吉、戸田 亀吉、岡田善次郎、森田丑之助、鎌田金太郎、桶谷 北郎。(以上38名)

大正5年正月の新年会で老人組は神社を、若手組は消防団をつくろうと申し合せをしたのだった。神社の方は其の全部が地元で調達出来たので容易に完成を見たのであったが、消防団の方は、「器具、機械、置場建物」を除いた全部を、当時の経済圏だった小樽市へたよることとなる為、一件一件の連絡でも仲々計取らず、随分と煩わしいことに挑戦した事になった。

ここで、決意を新たに現在の久連大正団を解散し、久連厚誠団と改め、年令も今迄の40才位迄とはっきりしなかったものを35才迄に限定し、役員を改選し、厚誠団旗を作ることとし、茲に新しく出発したのであった。資金は久連部落、長浜部落の一部、蘭泊部落の一部より寄付を仰ぎ、其の額は大凡1千円と思われる。

調達品目は次の如し

団 旗	1 旒	
三号消防ポンプ	一 式	東京岡崎屋唧筒製所
マ ト イ	1 本	布入製
梯 子	1 キ	
帽 子	38	
長 判 天	38	文字入れ
真 田 帯	38	
長 柄 蓑	12	
高張提灯	1	
小 提 灯	12	
ラ ッ パ	1	
機械器具倉庫	1 棟	

(中 略)

次の見積書に依り契約したのであった。

三号ポンプ 1 式 500円

布入製マトイ 1 旒 23円

全品目の到着がはかばかしくなく、ポンプ等の一部は、翌大正6年になったものである。

6月には全品目が揃い、機械の放水運転を済ませ、神社前で器具を中心に全団員正装、(帽子、長判天、真田帯、地下足袋)して記念撮影し、茲に厚誠団による私設の消防組が発足したのであった。

(以上「久保田氏記録」による)

厚誠団のこの年の経常予算は、3万9千円積立金拾壱万円を有し、宗谷管内的にも最大の資金を

持って運営され、当時盛んに行われていた剣道にも精励し、学校行事、部落内諸行事に積極的に協力体制を整備し、部落内に於て大きな力を発揮したのである。

時代は変って昭和年代に入って軍事色が濃厚となり、昭和9年11月、仙法志青年団久連（第七部分団）分団に改組され、会長も変って山崎時二郎氏となり、分団長名となり、村政にも参加している。戦時中には戦争への出兵で弱体化したが、戦後全く新しい青年会の再スタートになった。

なお、厚誠団は、消防活動に重点をおき、仙法志消防組が設けられたが、これには参加せずに、独自の活動を続けたようである。

新青年会の新発足

昭和20年8月終戦となって、自由な活動の元に自主的各部落毎に青年会が結成されたのである。即ち昭和21年2月4日、男35名、女13名計48名の会員を以て、「久連青年協和会」がつくられた。会長に山上富栄が就任、各部落青年会も華々しく青年らしい活動を行った。青年会館も建設し夜学を実施した。

なお、これまでの青年団は男女別々に組織されていたが一つになったものである。学校行事、祭典（青年樽御輿）相撲、健民運動会、各村青年競技会、剣道大会など以前からの活動であるが、部落演芸大会、村内合同の演芸会、弁論大会等新しい自由な活動が展開された。野球に於ても無論である。

そして、この青年会内に民生倶楽部が発足した。その内容、活動は不明である。

しかし、昭和30年後鯉漁振わず、次第に青年は都市に流出して過疎化が進み、昭和42年頃まではなんとか維持出来たが会員減少著しく、自然消滅し有名無実化してしまった。これは1人久連のみならず、漁村地帯は全部同様であった。

女子青年に於ては、昭和3年1月15日仙法志女子青年団が創立されており、これより以前に処女会と称する女子青年の組織のあったことは仙法志小学校沿革史に記録されている。しかし、その発足の年月日不明である。久連には当然支部かまたは独立した組織があったと考えられる。それは、昭和13年2月6日に「女子青年団総会開催、組織変更ヲナセリ」と、久連小沿革史に記録されている。

また、同沿革史の昭和18年8月20日と同じく9月2日記録に、「女子青年団体操指導、銃剣術指導、奉安殿築設勤労奉仕」と記されている。

従って、他に特記するような活動はなく、行事事業へ補助的活動が続き、終戦となっている。

(2) 少年団

どのような趣旨内容で組織されたかは、現時点でそれを知る資料がなく不明である。

仙法志小学校沿革史に大正5年8月23日に、「仙法志少年団発会式」とあって、少年組織の記録としてはこれが最初である。

次には大正14年10月30日と、昭和16年4月29日の「仙法志少年団発団式及び入団式」の記事がある。久連小学校沿革史には、昭和16年4月29日の記録は全く同一である。

活動としては、時々競技会を実施している。戦時中は軍事訓練を実施していた。

久連少年団が昭和16年に初めて結成されたのは、久連小学校の高等科設置が昭和15年である事に起因していると考えられる。別に児童の校内組織があった事を考えると地域社会即ち部落内に於いてどんな位置にあったか不明であるが、当初は仙法志少年団に包含され、後に独立したものである。

大正5年の発足当時は、14才から20才までの年齢で120名で、「忠君爱国」「国民道徳」「身体の練磨」「読書奨励」を掲げて発足したものである。

団長は村長とし、学校長、軍人分会長、官公吏、学校職員、僧侶等を指導者とした。

戦後解散させられた。

(3) 婦人会

「大正3年1月10日、久連婦人会発会式並ニ第1回総会ヲ開ク」（久連小学校沿革史）

「この外に久連婦人会、処女会等あったが活動は……」（仙法志村50年史考）

明治年代より、仙法志村爱国婦人会があり続いて昭和年代に入って国防婦会に移行し昭和17年には両婦人会が強制的に統合された。

久連婦人会はこの中において独自の婦人組織を持った事になるが、両婦人会統合時に必然的に吸収統合されたものと考えられる。

また、同婦人会はどのような活動をし、どんな趣旨の団体であったのか、更には役員構成をしていたかも不明である。

戦時中には各部落会組織の中に婦人部をおき、戦争遂行の一翼を担っていた事実もある。

何れにしても、国防婦会としての活躍は名称の如く、出征兵士の番守を預り、戦前戦時中の銃後、即ち軍事的内の補助的活動を目的されていた事は間違いない。

終戦によってこれらは解散され、民主的で自由な婦人の組織化が進み、村内を一本化した婦人会が生まれた。

そして40年以後に組織替が行なわれ、意識の変化と共に、久連に於いても指導者婦人の層が薄く、遂に数年前に自然消滅した。

大正14年の仙法志村勢要には、慈善団体として、仙法志爱国婦人会、会員225名で特終、通終、特別、通計に分別され、昭和2年になると会員が177名に減少している。

久連婦人会の活動の場所は久連小学校であり、学校長は同会においても大きな存在意義をもっていただよう考えられる。

(4) その他の組織

(1) 一心会

第7代久連小学校長、三浦林吉氏は大正2年10月4日より大正9年9月1日までの7年間奉職した。その間地域社会に一つの足跡を残した人である。

一心会は三浦林吉氏の提唱に依り地域住民生活安定の一助として、無尽講のよう互助精神に基づ

く経済団体が作られた。

しかし、これは余り長続きしなかったようである。大正7年7月9日に発会式を行っている。会長は三浦林吉氏であった。

(2) 諸 団 体

戦前としてはこの村に、一村組織である軍人分会、衛生組合、副業共励会等の役員が部落毎におかれ、消防団、水難救済会、体育協会、森林愛護組合、遺族会、納税組合の下部組織役員がおかれたのが戦後の事である。

また、旧久連小学校周辺一帯の地域はNHKテレビ難視聴区域にある為に、ここに住む受信者達は「共同アンテナの設置を要望して実現し、約20戸を以て、仮称「共同アンテナ受信組合」を作り、主に料金の徴収等仕事をしている。

(3) 久連自治会館

戦後新しく組織の久連青年協和会は、部落の協力を得て会館を建設し、活動の場とした。鯨漁の皆無によって人口減少し、昭和40年頃には会の自然消滅と共に、会館の運営維持は久連自治会に移行し、昭和58年に450万円の予算を以て増改築をしている。

現在も部落の全ての活動の場として活用され、全ての選挙の投票所として利用されている。

5. 教 育

(1) 環 境

玖津礼小学校設置運動が具体化し、その活動に入っていた当時の教育機関の状況は、本村中央に既に、仙法志尋常小学校が明治26年に開校され、隣接村の沓形村に於いても沓形尋常小学校が明治26年に開校していた。

また、直接に隣りする交流圏内にある蘭泊にも分校開設への動きが始まり、年々増加する人口の増加と共に、子弟教育機関の設置が玖津礼部落に於ては何物にも優先する重要課題となっていたのである。

そしてまた、居住地域の道路の危険性も考慮する事に依って大玖津礼の地に校舎を建設する問題に於ても衆論一致していたようである。

更に、隣の蘭泊部落に於ては、沓形尋常小学校蘭泊分校として、玖津礼小学校より早く開校し、久津礼部落より通学する児童もいた。蘭泊小学校に於いて上部機関の指導助言により、玖津礼部落を包含した、一つの組合学校をとの動きもあったのである。

このような状況の中で、玖津礼校の開設は難渋を極め、蘭泊小学校に一步遅れるという結果となったのである。

(2) 開設への始動

本小学校の開設までの由来変遷を知るには二つの記録が残っている。

1つは、玖津礼尋常小学校沿革史がある。当初この記録を執筆した人は、大正5年9月1日、久連小学校第七代校長三浦林佑氏、(大正2年10月4日着任～大正9年9月1日離任)である。

三浦氏は、巻頭の「緒言」にのべている。「余ノ本校ニ職ヲ奉ズルヤ消長変遷ヲ知ラント欲スルモ、完成セル記録ノ徴スベキモノアラザリシカバ、沿革史ノ編纂ヲ企画シ大正四年八月ノ夏期休業ニ於テ着手スルモ如何ニセン、創立以来年ヲ閲スルコト二十年ニ垂々タルノ今日諸記録ハ殆ド散逸シテ今ヤ憑據スベキモノ甚ダ少ナク只僅ニ残存セル一部ノ記録ト校下古老及先住者ノ伝フルトコロトニヨリ、之ヲ綜合シタルモノヲ一冊子ニ綴リタルニ過ギズ」とある。

また、久連在住久保田広市氏が、昭和61年12月に話した「寺子屋式教育所の建設」の記録の文頭に、「伝えられるところによる、今を遡ること約90年、明治25年、当時杵形、仙法志には既に小学校が設置されて、……」とあって、以上2つの記録から考えるに、開設への動きは明治25年と考えてよいが、実動展開は明治26年以後ではないだろうか。他の詳細についても大部分一致している。

(3) 進歩会の結成

同校年表第1頁、「明治25年」とし、次の筆文には、「同年中、當久連部落住民共同ノ利益ヲ保全スル目的を以テ、加藤幸助、高木繁松ノ兩人率先シテ進歩会ナル私設ノ団体ヲ組織シ、会員拾八名アリ。偶々、一漁夫アリ、函館ヨリ来リ当地ニ子弟ノ教育ヲ托スベキ学校ノ設ケナキヲ以テ越年セズシテ帰ル、加藤幸助、茲ニ於テ当部落ニ学校ノ必要ナルコトヲ痛切ニ感じ、教育所如キモノニテモ設置セント奔走シ、当村戸長綾部正吉氏ニ交渉セシニ遂ニ経費支出ノ途ナキ理由ヲ以テ拒絶セラル、茲ニ於テ当部落民限りノ負担ニテ設置ノ他ニ道ナキヲ知り、加藤幸助、之ヲ進歩会ニ商議シ、同会ニ於テ寺子屋的教育ヲ設置スルコトニ協定セリ」

また、久保田広市氏の記録には、「このことは児童にとって大変不幸なことであり、之を救い上げるは父兄のつとめなり、と、いたく教育の必要を感じた山上平七氏は数人の解け合いる同士と寄り寄り協議をかさねた上、「公費による分教所の設置」を目標に行政に働きかけ、その実現を期することにした。

そしてこの請願運動には有力者の率先指導こそ必須と考え、今で言う、久連第六班の地にて鰯漁業定置を経営し、地区住民経済に大きく貢献し、人格高邁な老紳士、高木繁松氏、及び学識経験豊かにして部落内行政その他一般の指導者たる加藤幸助氏の両氏に意向を伝えたと、快よく同意され、その先達となりて努力することを約束されたのである。

驥を両氏を始め数名の代表にて戸長役場に請願を始めたのであったが予算なしと取り上げられず、再三に亘る交渉にも、「校舎の建築、教科書の購入、校具の整備、教員の配置等多額の予算が必要なため、とても不可能なり、と、早急な実現は困難と思われた。」

このように山上平七氏の提言提唱進言に依ってその体制組織は整ったが、初回より戸長との折衝に於て、この問題は暗礁に乗り上げてしまったのである。

(4) 住民手作りの教育所

以後、この問題にどう対処したかについては、次の記録を引用したい。(久保田広市氏記録)

「だが子弟の教育は1日も忽にすべからず、分教所の出来る迄、地区住民費用を持って教育所はつくれないだろうか、先の進歩的な同志達が、このことについて鋭意検討をつづけたが、……

ここに於て、「児童教育を一時あきらめるか。」「困難なこと乍ら地域住民に働きかけ、協力を得て教育所をつくるか。」

岐路に立ったのであったが、先人達の教育に対する情熱はさすが見上げたもの、敢然後者をとって、地域有力者始め住民一般に対し、連日懇願説得につとめた結果やっと賛成協力を得て、先づ舎屋の建設に着手することになった。

また、同校沿革史には、

明治27年

明治二十五年進歩会ノ協議ニ基キ予算金七十円ヲ以テ教室ノ建築ニ着手セントシテ官林ヨリ右用材ヲ払下ゲ同年冬期ニ至リ、進歩会会員一同之ガ伐出ヲナセリ。

明治28年

前年進歩会ニ於テ教室ノ建築用材既ニ準備セラレクルハ、建築ニ着手セントセシニ前年ノ予算七十円ニテハ、到底竣工ノ見込立タズ、百五十円ヲ要スル予定トナリシ故本年尤建築ヲ見合セタリ。

このように苦慮苦難が続き、実現までには尚容易ならざる悪戦苦闘が続いたのである。

更にこの困難は次のように続くのである。

同校沿革史には、

明治29年

前年ノ予定ニヨリ愈教室ノ建築ニ着手セントセシニ、予算更ニ前年ニ倍シ、参百円ヲ要スル見込ミトナレリ、是ニ於テ、加藤幸助、思イラク、斯ク年ト共ニ建築費ノ増加ヲ来タシ、其ノ支出ノ途ナキ理由ヲ以テ空シク歲月ヲ経過セバ遂ニ設立ノ期ナカルベキヲ憂イ、断然決スル所アリ、既チ進歩会ニ議リ、此ノ年ヲ以テ建築ニ着手スルコトニ一決シ、加藤、高木ノ両氏、当時本村総代タル出村友次郎ニ交渉シ、同人ヨリ右建築費ヲ借入シ、九月工事ニ着工シ十月ニ至リテ落成セリ。

また、久保田広市の記録には、「前期山上氏始め進歩的同志達が先頭となり、官林より用材の払下げを受け、木挽、大工総がかりで製材し、一方建設地は久連672番の村有地を借りうけ、敷地を整地し、小規模乍ら住宅兼教室の棟を建設し、生活用具用品は近隣各戸より持ちより、当時難職浪人中なりし、藤井健氏を教師として迎え、教育用図書を購入し、読み書き、計算を主とした教育が始められたのであった。

所謂、寺子屋式教育所と言われ、此の地始て教育の道がひらかれたのであった。

このようにして困難を克服しながら、住民一人一人の手作りの学校が建設されたのである。最初の教員にしても一朝一夕に行かなかった、沿革史の記述に依るに、「而シテ校舎漸ク竣工セント雖モ教員招聘教授用図書、器械の設備ナキヲ以テ、加藤、高木ノ兩人協議ノ上、綾部戸長ニ交渉シテ教員俸給ノ補助ヲ得ンコトヲ歎願セシモ予算ナキノ故ヲ以テ拒絶セラル。」

また、「当時本村ノ総代タル出村友次郎ヲ介シテ更ニ綾部戸長ニ対シ、教員俸給ノ補助ヲ申シ込ミ、月額金拾円ツツ支出ノ承諾ヲ得タリ。

是ニ於テ鬼脇村高木直ノ紹介ニヨリ、秋田県人、関東ナル教員招聘ノ約成リ、俸給以外ノ図書器械ハ一切進歩会ニテ負担支弁シ、漸ク開校スルヲ得タリ。

7月1日

開校 仙法志尋常小学校玖津礼分校ト称ス。

右開校ニ付、校舎建築教授用具設備費、347円30銭ヲ要セリ。（悉ク当部落有志及進歩会ニ於テ支弁。）

7月12日

授業開始、全校児童、男15名、女7名、計22名。校庭ニ整列シテ開校記念写真撮影とある。

従って両者の記録に依って詳細を知る事が出来るが、最初の教員は、同校沿革史通り、関東氏で、5か月間後の、即ち玖津礼分校として認可され、正式に発令された教員が藤井健氏である。

また、建設位置は大久連の現久連神社の所であるが、どのような理由で場所が決定されたかは不明である。

一説には、通学路の危険箇所がある事と、大久連の住民が、開設運動の主流を占めていたと考えられる由もあるが、「玖津礼分校新築費寄付者調べ」を見るに、全て容認されない部分もある。

更に、現久連部落だけから考えると、現学校周辺集落の児童数よりも多かった事も考えられる。しかし、当時シサンベツ、現長浜部落の児童教育をどう考えていたかは、現存資料、また現調査時点では不明である。

現在利尻町史編纂室に所蔵されている同校の資料を紹介すると、

明治30年仙法志小学校玖津礼分校新築費寄付者調（寄付者姓名、住所のみを記す）

石川県能美郡湊村	加藤 幸助
福島県石城郡船岩川村字藤原	高木 繁松
石川県河北郡内灘村	北川幸三郎
北海道利尻郡仙法志村クズレ	堀 豊治
“ “ 沓形村番外地	本間菊五郎
“ “ 仙法志村番外地	桶谷夢三郎
石川県河北郡内灘村	喜多正右衛門
利尻郡仙法志村クズレ	越後谷岩吉
福島県伊達郡森木口村字西町	阿部 末吉
利尻郡仙法志村クズレ	松井 作松
“ 沓形村ランドマリ番外地	古山 直吉
石川県河北郡内灘村	中出直次郎
	山上 平七
利尻郡仙法志村クズレ	浜坂栄太郎

渡島郡桧山郡泊村	西川寅之丞
利尻郡仙法志村クズレ	田中平四郎
後志国古平郡古平村丸山町	棚橋 長吉
渡島国函館舟見町	岩崎 言平
石川県能美郡	北村 与助
石川県河北郡内灘村	大山善太郎
利尻郡仙法志村クズレ	磯井 ミト
” ” ”	藪 長三郎
” ” ”	三安德次郎
” ” ” (福井県)	松下松五郎
” 杓形村番外地	舟谷与三吉
” 仙法志村クズレ (青森県)	木村源三郎
” 杓形村ビヤコロ	川口徳十郎
青森県西津軽郡森田村	七戸藤太郎
宮城県本吉郡気仙沼村	増田平五郎
石川県河北郡高松村	竹中与三松
利尻郡杓形村マタマカ	永浦 大吉
” 鬼脇村	志田利喜治
利尻郡仙法志村クズレ	長谷川喜作
” ” ” (鳥取県)	沢山久太郎
” ” ” (青森県)	加藤 セキ
” ” ” (秋田県)	関 勇助
合計、金三百四拾七円三拾銭	
右之通相違え無候也	

明治30年第11月11日

新監査委員	加藤 幸助
同	高木 繁松
同	堀 豊治
同	山上 平七

鬼脇外ニ村戸長

原 慎吾殿

以上36名で、多くは、54円、少額で1円になっている。

進歩会結成時の会員18名になっているのは当時定住者の数から考えると殆どの住民の参加であり、人口増加の続いた、校舎建設当時を考慮するとこれまた殆どの住民の協力があったといえよう。

また、大久連住民の協力で実現したかのように一見される由もあるがそうではなかった。

(5) 保護者、PTA関係

このようにして、玖津礼尋常小学校は誕生し、明治34年8月には独立校として認可され、同年には喜びの5周年記念運動会、続いて独立祝賀会が盛大に行われた。

同35年9月には、道路事情も若干改良されて、現在地に校舎を移転し、長浜地域児童の通学が便利になった。

地域社会に大きく貢献しながら大正年代に入り、大正の初には父兄会がもたれるようになり、続いて同10年には保護者会が発足し、初代会長に、平田豊作氏就任し、死去する昭和14年9月3日まで務め、この間の尽力は計り知れないものがあった。この前年には加藤幸助氏と共に保護者会、地域全体の万厚の謝意を表す、「報労式」を執行し、肖像画を進呈した。

後に、長浜の柴田作五郎氏2代会長となり、昭和21年には同部落佐孝助市氏が3代会長となった。終戦後昭和22年学制改革によって、PTAと組織が変わり、昭和22年1月に新発足をしたのである。

初代会長(長) 笹谷清一 昭和27年1月迄

2 " " (長) 森本信義 昭和33年4月迄

3 " " (長) 石垣徳太郎 昭和39年1月迄

4 " " (長) 佐々木吾郎 昭和43年1月迄

5 " " (久) 門田真一 昭和45年3月迄

6 " " (長) 佐々木吾郎 昭和49年3月迄

7 " " (久) 岡田一雄 昭和61年4月迄

8 " " (久) 川原 理 昭和62年3月迄(同日閉校)

同窓会の発足は大正5年11月3日平田金二氏の努力に依ったものであるが、以後については、昭和38年1月に、久連小中学校同窓会を再び結成されている。

(6) 学校の変遷

(1) 戦前

明治34年8月独立校となり、その翌年長浜590番地、即ち現在地に校舎を移転しその姿を一新した。大正時代は確立期に入るが、地域的活動に全面的積極的に中心的約割を果たしている。

同窓会、父兄会及び保護者の創設してその基礎の確立に努め、更には、婦人会、青年会活動にその場を提供し、地域活動の中心となった。それはまた、平田、加藤の両氏強力なる支援者、山上、沢田の両氏の熱心な協力によるものも大きかった。

同15年11月には校舎修築落成を見るに至るまで、三浦林吉、沢田俊吉両氏二代に亘る13年間の歳月も、この両校長の指導者的存在も見逃せないものがある。

一つの大きな問題として、グラウンド、(校庭)恵まれず、絶えず場所を変更し実施しなければならなかった運動会の苦勞から、新設グラウンドによく乗り出したが解決には至らなかった。

高等科が設置されたのは昭和15年3月、通学両部落の全面協力によるものであった。

それまでは、大久連在住高等科生徒は沓形小学校へ、久連長浜地区は、ワラジヤツマゴで仙法志

小学校に通学しなければならなかったのである。

戦時になって、その名も久連国民小学校と看板も変り戦時色にぬりつぶされたが終戦となり昭和22年4月新学制により、仙法志中学校久連分校併置となり、小学校名も元に復した。

(2) 戦 後

戦後の混乱期を乗り越え、29年、30年校舎の改築、新築され、小中学校共にスポーツにその名を知らしめ、久連校の伝統を作った。

長浜の柴田豊作、柴田栄作両氏の再三に亘る教育器材の寄贈は、児童生徒への教育効果を高めたのであった。昭和36年6月23日には、協議会長として開校60周年記念行事式典を挙行している。

しかしながら、昭和34年度の児童数146名をピークに次第に減少傾向になっていた。児童数の半減した昭和46年9月11日に、大富千代太郎氏の協議会長のもとに開校70周年記念式典を執行し、同校の発展を念じた。

昭和50年11月、現在の新校舎が完成し、電気暖房（全校舎）と画企的施設として注目されたのであった。

(3) 廃 校

40年代から急速に進んだ老令化社会、即ち過疎化が廃校へと追い込んで行ったのである。

両部落の中長浜は特に児童生徒数の減少が大きく、再三協議の結果、久連中学校は仙法志中学校に統合したのは、昭和55年3月であった。かつての生徒数の約4分1の16名であった。

この時の児童数26名、この時点では廃校などは誰一人として夢にも思わなかった。

先生も父兄も児童も一丸となって、母校の発展に力を注ぎ、昭和56年9月13日に開校80周年記念式並その行事を実施したのである。この時の協議会長は森本清栄氏である。

この頃より久連小学校も廃校問題が公言されるようになり、多くの右余曲折を招いたが、自分の母校でもあり、また教壇にも立った経験のある草間喜美男氏校長として赴任したのが昭和60年4月、そして9月になって再三の協議の末に62年3月を以て廃校する事が決定された。

この時の児童数9名、開校85周年、閉校記念事業実行委員会を発足させたのである。考えられるあらゆる事業を精力的に展開された。そして、児童数4名、昭和62年3月、校長の涙とうるむ声の式辞で遂に閉校となった。その後久連小学校歴史保存会が設けられた。

歴代学校長

初代、 藤 井 健	明治31年12月より3年3月
2代、 豊田 栄成	明治35年4月より1年4月
3代、 緩 坂 栄	明治36年8月より1年9月
4代、 大幸 文助	明治38年5月より3年3月
5代、 河東田甚之丞	明治41年10月より3年6月

6代、	竹中東一郎	明治45年3月より1年4
7代、	三浦 林吉	大正2年より6年11月
8代、	沢田 俊吉	大正9年8月より6年11月
9代、	竹内 久雄	〃〃15年より5年5月
10代、	竹中 一正	昭和5年より8年1月間
11代、	木下 三良	同 13年5月より3年6月間
12代、	赤川 丸志	同 16年11月より2年10月
13代、	加来 茂	〃 19年6月より2年9月間
14代、	寺島 功時	同22年4月より2年間
15代、	柏倉 玄宙	同24年3月より4年2月間
16代、	東 信秀	同28年5月より2年間
17代、	松田 正雄	同31年5月より3年7月
18代、	尾川 巖	同33年11月より4年5月間
19代、	小笠原宗雄	同38年4月より5年間
20代、	三浦 勇	同43年より4年間
21代、	中山 愛敬	同47年4月より5年間
22代、	吉田 祐司	同52年4月より3年間
23代、	山田 幸夫	同55年より5年間
24代、	草間喜美男	同60年4月より2年間

開校85年、閉校記念事業実行委員会役員

会 長 岡田一雄

副会長 大高綱千代、川原 理

総務部長 加藤正美、記念誌部長 須藤順一

事業部長 藤田武利、事務局長 草間喜美男

P T A役員

会 長 川原 理

副会長 佐藤 勉、木村忠男

監 査 大高綱千代、藤田武利 書記 田中正

久連小学校運動会応援歌

1、待ちに待たる運動会

きたれりきたれり嗚呼愉快
立てたる旗はひらめきて
吾等がために祝うなり

2、待ちに待たる運動会

きたれりきたれり嗚呼愉快
歓呼の声をひびかせて
奮いよきそいよたたかいよ

6. 宗 教

(1) あらまし

久連部落における宗教分布図は、旧仙法志村内西端で中央市街地より約6軒の地点にある実態からして、寺院はなく、現仙法志字本町中心に存在する各宗寺院、または、沓形市街地存在する各宗寺院の檀信徒になっている。

従って佛教関係信者は先祖の出身地に特色が見られるが、その寺院の法要行事に参詣し、精神的支柱を得ている。

神道関係に於ては、旧村社仙法志神社を中心として各部落神社は遙拝所とした分社的性格を持ち、本社仙法志神社例大祭同様に祭礼行事が実施されている。

他は民間信仰的要素が強く、龍神、弁天信仰は大正初期から末期で比較的経済的精神的余裕の得られた時の所産と考えられる。

他のもう一つは戦後の混乱期に出現した新興宗教的要素を多分に含んでいるといえる。

(2) 佛教各宗信者

大正10年を基準にして調べてみると、久連の戸数約百戸程であった。戸口人口の変化は既に記述した通りであるが、各宗寺院の信者の割合は殆ど変わらない。

また、各寺院信者とその先祖の出身県に一つの特徴が見られる。

浄土宗専称寺

この寺院は村内1か所の寺で隣接各村にはない。部落別には、久連に最も多くの信者が存在していた。鳥取、青森の2県の出身者に多く、次に秋田県である。久連全体の17%である。

曹洞宗(禪)広鏡寺

こども村内一か寺であるが各村にもある。久連全体の約17%で殆ど秋田県出身者で占められている。また、一戸もない県もない。戦後沓形への転出者がいるが全部が沓形の同宗寺院の所属に変わっている。

日蓮宗(この寺院は村内にはない)

久連全体の5%の信者を有し、新潟、千葉の各県出身者が多く、沓形妙生寺、鴛泊の寺院に別か

れている。現在信者はいない。

真宗関係

村内に3か寺あり、隣村にも2か寺乃至3か寺あって信者は断然他の各宗に比して多い。そしてまた、隣村寺院の信者に分布し、まちまちである。

- 真宗大谷派西円寺 仙法志村
- “ “ 大安寺 杓形村
- “ “ 正徳寺 鬼脇村 (現在廃寺)
- “本願寺派龍雲寺 仙法志村
- “ “ 明源寺 杓形村
- “高田派 授法寺 仙法志村(無住)

これら合わせて、久連31%の信者をもっており、石川県出身者には大谷派が多く、福井県出身者には本願寺派が多い。

佛事や風俗習慣の中に先祖の故郷があり、心の支えになっている。

天理教信者も1名いたが現在はいない。

(3)久連利尻神社

大正の初期、続いた鯨豊漁に浜は賑い、漁民の精神的なものにも、自然の恵みを感じ、即ち「神」への崇敬の念が起り、特に老人の気持が強く表われ、「神社が欲しい、神社が必要だ」という悲願となり、神社創立が具体化して行った。

久連久保田広市氏の久連神社創立記録に依れば、大正5年1月3日に、部落新年会を開き、その場に於いて、神社々殿建立の議が万場一致で決し、創立委員会が設置されたのである。

建立委員には、大沢由蔵、鎌田貞吉、棚橋長吉、村上延吉、根上春吉の5氏となり具体化して行った。

拝殿ハ、間口、奥行共に2間とし、3尺の神殿を設ける事とし、鯨漁期終了後直ちに着工し、現在地に石垣を築積して齋地とし、9月16日に小規模ながら懸案の久連神社が創立されたものである。

祭神は仙法志神社の宮司の斡旋により、利尻神社より分霊を受け、仙法志神社の宮司により、入魂落慶式を執行され、同年10月に、久連に於ける「利尻神社」が創立されたのである。

従って、当初は、仙法志神社の分社ではなく、鴛泊の「利尻神社」の分社的性格を持たせたもので、地域住民的な心情の一端をうかがわせるものがある。

何れにしても、部落民総意に基く、部落民の総意意願が実現された事になる。

その後、神社建立委員は、引き続き神社世話係としてその後の推持運営に当り、昭和10年代に至るまで、この形態をとってきたものと考えられる。

また、当時の氏子崇敬者名に依ると、神社崇敬者は、現在の久連部落一円の住民ではなく穴間、(厳島弁天宮)より、西側に居住する、即ち大久連に住む人達だけになっている。

変遷については、利尻神社から利尻富士神社に、また、久連神社とも呼ばれるようになり、村社

祭典時には、これら各神社名の織りが上がり、まちまちなものになったので、昭和30年代に入って、久保田広市氏は、仙法志神社宮司と相談し、村社の拝所になっている事だし、各他部落のように部落名を冠して、久連神社に統一したらとの意見により、部落民とも相談した結果、その方がよいとの結論に達し、「久連神社」と呼ぶようにしたものである。

各部落神社を遙拝所としたのは、昭和13年に戦時に於ける国民の精神統一を国策とした、国家神道制度を強化し変革した事に依るものである。

それを物語る資料によれば次のようになっている。(旧仙法志村神祠調査票、昭和17年 1月)

神祠称号、利尻山仙法志神社、

祭 神、大綿津見神、大山祇神

由緒沿革 大正6年9月6日、祭神勸請鎮

座

敷地坪数	6 坪
並に所有名義者	益田岸太
建物の種類坪数	拝殿本殿兼用 4 坪半、鳥居一基
崇敬者総代員数	2 人、上田精治、吉田晋次郎
維持方法	久連部落民の寄付、1 年60円
関係神職名 仙法志神社々掌	常磐井武敏
崇敬者の居住区域及び戸数	57戸、久連部落民一円
例祭日	6 月21日
積立金	ナシ

終戦後もこの制度が続き、部落から自治会と呼ばれるようになり、現在は自治会長が責任者となり維持されている。

なおまた、本年中に新改築の気運がある。

更にまた、創立当時に手洗鉢が寄進され、現存しているが、奉納者名には、村上延吉、棚橋長吉、棚橋寅吉、濱本岩吉、鎌田貞吉、大沢芳蔵の6氏が刻名されている。(濱本氏は大正3年に沓形に移住し、神社建立時に、神社の件を聞き寄進したものである。)

以上の各氏は創立功勞者になっている。

また、久保田広市氏の記録中に、創建当時の大久連在住部落民、(崇敬者氏子名)がある。

吉田 健助、松井 竹松、喜多庄右衛門。

安藤 円蔵、磯江佐太郎、荒谷光太郎、大沢 芳蔵、伊端 幸作、加島 善太、益田 直平、鎌田 貞吉、上田 万治、川村 幸助、棚橋 長吉、根上 茂吉、原崎作次郎、木戸口作衛門、久保田広吉、藤元 晋吉、木村福太郎、川合 善吉、山上 寿平、笠原 大作、北辻与惣松、村上 延吉、小玉 友吉、松下 米造、岡島 春正、竹石 健吉、山上平三郎、山上 石蔵、土佐由太郎、堀 豊太、越前 峯吉、三上勘次郎、竹中和八郎、高杉 佐吉、根上 春吉、木村 島蔵、小杉喜一郎、小杉喜代治、斉藤清三郎、堀 増五郎、木村 政吉、桶谷 漁吉、新谷石太郎、檜山 仁

太郎、戸田 兼吉、森田丑之助、岡田善太郎、平田 豊作、古川 喜八、佐藤弥五郎、山崎初太郎、藤原勇五郎、小屋 勘蔵、村田 権助、加藤 幸助、高谷 友、金子……。以上60名

久連神社の祭礼行事については、久保田氏の記録の中に次のように述べている。

一、 1月1日は毎年宮司さんをお迎えして、元旦祭を行うが例であった。

宮司さんは1日午前零時、年が改るを待って、先づ本社に礼拝し終って深夜雪道を御崎神社より逐次各部落の神社を参拝するので、当利尻神社へは午后になり、参拝を終ってゆっくりと休憩をとり、夕方又徒歩でお帰りになったもので、当日は朝から1日のおつとめは大変な御苦労だったものと思われた。

一、 3月鯉漁期前には例年鯉豊漁祈願祭がいとも厳肅に行なわれた。

一、 6月の祭典には部落内数か所に御神灯を掲げ、幟を立て、社前に大きな舞台をつくり、宮司さんによる神楽舞も行なわれ、行列の去ったあと、流しの民謡や浪曲も催され、大勢の人が集まり、出店も立つような賑わいであった。

現在では年1回6月に行なわれる、仙法志神社の例祭が郷土の祭典としてのみ、部落内班毎の祭当番として準備執行等に当たっている。

(4) 北の巖島弁天宮

創始者は村田勳助氏で、明治35年に加藤幸助漁場に出稼ぎ後、漁場近くの穴間に生活の根拠地とし、戦時中迄ここに住んでいた。村田氏は青森県三戸郡長笛村大字根岸字前九番地の人である。

この人は神経痛という持病に苦しんでいた。ある時修行者の訪問するところとなり、事情をうったえた処、小祠を作り、「弁天さん」を祀ることを指示され信仰した事に始まる。

個人信仰であったが、大正3年頃に余市から沓形へ向かっていた、リング船が、荒れる秋9月にこの沖で遭難し、船体は打ち寄せられ、帆柱が折倒れて穴間にかかり、乗組員1名が助かった。これが「弁天さん」の祭祀されている岩であった事から近隣の人々の信仰を集めるようになったと言われている。

村田氏移転後の戦後も若干の信者がいて信仰されていた。

そして、昭和40年代に入って、信仰も去る事ながら観光開発の視点から、徹底的なる弁天宮の中興再建が行なわれた。これの観光地化が昭和42年から進められ、穴間一帯の岩石が景勝の地として完成したのが昭和47年で終り、「弁天さん」の神事が最後となったのである。

当時自治会長であった藤田長利氏と元老大山甚松氏の寝食を忘れた苦労があったという。

最初、病気治療から海難に、そして豊漁の神々と信仰内容が変化した。漁業神に変わったのは再建工事中に姿を見せた龍の夢告により、その名称も龍神弁天宮に変わり今日に至っている。しかし、昨年の9月1日の12号台風の影響により、大時化の為に「祠」は流失した。

現在信仰者に、藤田長利、大山甚松、橋山仁三郎、佐藤一夫の各氏がいる。

最近再建策が具体化されつつある。(昭和61年博物館年報に報告)

(5) その他の宗教

昭和30年代までは、他に2つの民間信仰的信仰集団とそれに近い信仰集団が存在していたが、祭祀者の引越移転によって現在は信者のみとなったものと、消滅したものとがある。

①高杉の龍神さん

創始者並に祭祀者である、高杉佐吉氏である。同氏は、明治40年頃に秋田県南秋田郡天王村より来住し、加藤幸助漁場で働く漁師で、現在のホマ場所の近くにある、「堀ノ沢」に住居していた。

祭祀信仰の動機や年代は不明であるが、現在も沢の断涯状の中腹にその跡地が確認され、昭和30年代までは祭礼日には近隣の人々が参詣していた信者も確認された。

社会的、経済的にまた諸般の状況から推測される事と現司祭者の口述からも大正初期に始まったものとするのが妥当性がある。

主として大正年代は高杉佐吉氏、その子金助氏は昭和30年代、以後佐吉氏の孫に当たる勇氏（現在）と祭祀信仰が続いている。

高杉氏個人の豊漁を願う神として信仰が近隣にもその影響を及ぼし、漁民の1つの心の依り所とされてきたものである。

利尻島内中にみられない、「山の神」「絵像」彫刻の高さ1米、幅40センチ程の石神像である。これには深い因縁があると考えられる。

高杉家は鯨漁皆無後数年にして、杓形字日之出町に転住し、機船漁業を営み、自宅の裏に龍神堂を設け、祭祀信仰されている。

②八大龍王大自然愛信教団利尻支部

この創設は昭和21年6月1日に宗教法人として、旧久連小学校に隣接している、三浦政吉氏の自宅の8畳2室を使用し発足したものである。

由来は、同氏夫人フユ氏が難病に患い、各地病院に入院したが、各医師共に病名不明のまま見離され、いよいよ重体になった時に、この教会への入門を進られて信仰に入り病気が治り、同教団の布教師となり、自宅に支部を設けたのが始まりである。

祭神が、八大龍王、馬頭観世音で經典は神佛一切教で、毎月15日を祭礼日としていた。

主な信者には、杓形、今野新三郎、長金次郎、久連では、門田市蔵、三浦政吉、檜山仁三郎、長浜の佐孝助市の各氏らで、昭和29年5月3日付を以解散登記された。が、実際には祭司者三浦フユ氏によって祭祀信仰行事が執行され、近隣及び長浜の一部に信者があって、毎月15日に15名位いから20名程の参詣者がいた。

昭和40年頃に三浦氏稚内に移転したが、信者は現存しており、根強いものがある。現在川原氏の自宅裏に、馬頭観音碑があり、八大龍王専用のカレンダーが各家庭に掲げられている。

しかし、当初は病気治癒の神の個人信仰であったが、昭和29年の名目的解散時頃から、漁の神、海の神として信仰していた事実があり、このように変化して行ったのも民間信仰的である。

そしてまた、穴間の弁天宮と共に関連を以て信仰されてもいる。

7. 風俗習慣

現在は揮然一体化し、平均化されてしまった。各家庭に具体的に表われるのは、お祭りやお盆、正月である。

それは、神棚や佛壇に供える供物や供え方に少しずつの違いがある。食物でもそうである。また、家庭の間取り、佛壇や神棚の祭り方にも、先祖出身地のものと思われる姿があった。

すべてを知る事は出来なかったが、正月用餅は、食べる餅は普通4角の切り餅だが、因幡衆は丸餅に作るのである。

またこれは、俗信であるが、葬式の棺に使用した白布は、魔除け、病気を治す、という考え方も残っている。

冠婚葬祭等は大袈裟に派手な事は好まない。互助精神は普通であるが、開放的な部分もある。また、民間信仰からくる精神的な生活にも特色があって、これらの信者の多くは秋田衆である。事故死が他部落に比して多かったのは、自然災害を除いて考えると何か地域的な精神風土があったのだろうか。そして、自己を象徴化する人々もこの地域住民に多い。

8. 不幸な出来事

学校関係

明治35年2月26日、初代校長藤井健氏、精神異常で急死し、この年の9月に校舎が現在地に移転している。

翌年の7月1日には2代目校長の豊田栄成氏も死去し、連続しての不幸であった。

同39年8月19日には、教育所創立に盡力した堀藤治氏が亡くなり、44年9月には児童の死亡、9月の斎藤教員の死去があって引き続きの悲しみに会っている。

更に教育所創設の先駆者と言われ、また、区長代理を務めた山上平七氏の他界もこの前後かと考えられる。

大正5年に入ってから、佐々木證順、油木定太郎両教員の半年から9か月間の病欠は児童にとって、3名の教員の中では教育上不幸な事だったと、述べている。

同6年2月の児童の死亡もあった。

その後は昭和一桁代までは特別の事はなかったようであるが、学校の前に家屋のあった沢田賢治は校舎移転後の並々ならぬ協力者であったが樺太に移転、昭和12年7月死去、その前の1月には同校卒業生の村上政男氏の戦死者があり、久連としては初めての村葬であった。

そして翌13年1日の加藤幸助氏の変死があり、14年9月の平田豊作氏が逝去し、学校創設並び協力援助者は全員が世を去った。

災害関係

明治42年1月の大流水郡の襲来があって人々を驚かした。

大正5年の4月の大暴風雪では、平田漁場の3名の漁夫が死亡する災難があって悲しみに暮れた。

大正13年12月、学校近くの栗山氏宅の火災、昭和13年1月の火災もあった。

続いて同15年8月の強い地震があって、津波があった。久連は幸いにも被害はなかったが、利尻

島では後にも先にもない出来事であった。

戦後では、同29年の5日に災害ではなかったが、この時期では例のない大吹雪があって来だに記憶にある。鯨場最中である。31年には、「堀の沢」では1月の末に雪崩があって、子供1人が死亡、2人を救助するという災害が発生している。

寒い北国でどこにも、数えきれない災害はあったが、身近な所に起きた災害程身に迫るものが大きい。

この他に多くの悲しい不幸なことがあったことは言うまでもない。

今でも語りつがれている不幸な出来事、忘れられてしまっている悲しい出来事は久連に住む人達にしか判らないものである。

9. 終りに

移住開拓が仙法志村内7部落中最も遅いと考えられていたが調査の結果それ程ではなかった。

沓形方面からの来住者は大久連に到着し、遅くとも明治21年には居住者がいた可能性がある。

明治20年代から居住者で現在二代目の大山善太郎氏の話からも伺い知られる。当時から続いて二代目居住者に喜多金助氏もいる。何れも石川県出身者であるが、現在久連では、開拓当時からでは二氏のみである。

出稼ぎは近年の事ばかりでなく、大正末期から昭和10年代に鯨不漁時樺太への出稼があって、寄留して移転定住した人も久連には多かった。

この調査に協力を願った方

久保田広市氏

氏は現在久連誌を執筆中であり、今回貴重な資料となった。

大山甚松氏

氏は久連の元老であり、生き字引的存在でもあり、多くの役公職を経験した。

岡田一雄、大沢正蔵氏

参考資料として採用した文献

久連教育所の創設、私設消防組の創立、久連神社の創立、大久連家屋分布図等久保田広市氏の記録集

旧仙法志村行政資料 明治35年～大正3年 利尻町史編纂室蔵

社寺明細帳 明治37年 利尻町史編纂室蔵

村勢要覧 大正4年 利尻町立博物館蔵

久連小学校沿革史 仙法志小学校蔵

工藤 浄真 浄土宗専称寺住職 利尻郷土史研究会々長

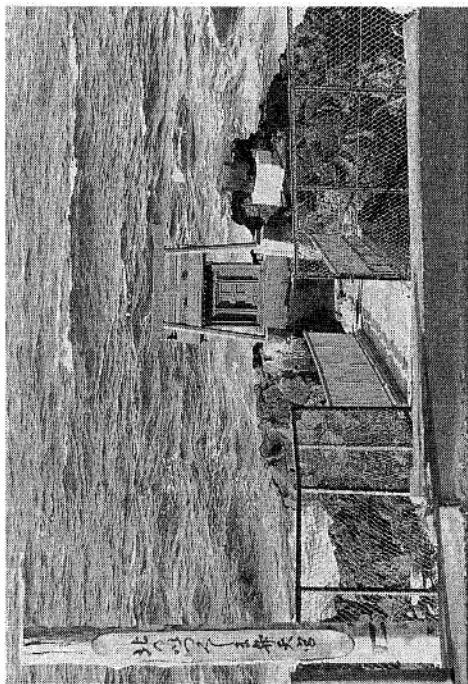


写真1 葦島弁天宮

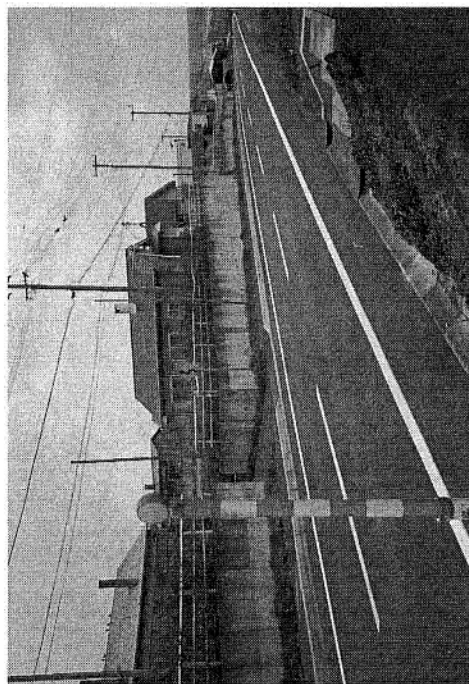


写真2 学校町周辺



写真3 堀の沢



写真4 堀の沢にある堀豊治碑

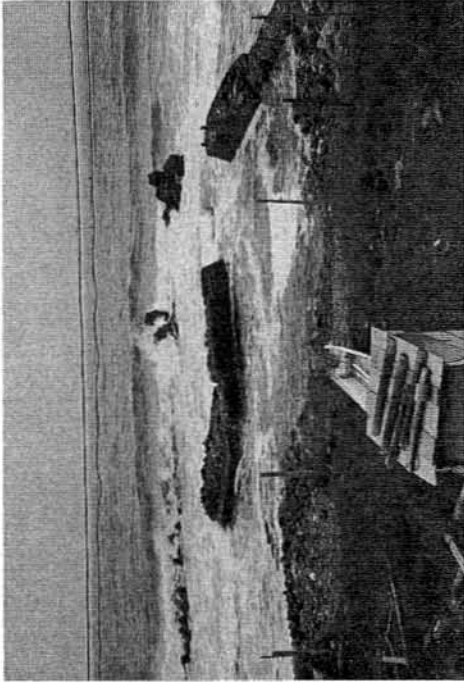


写真5 平田の袋洲

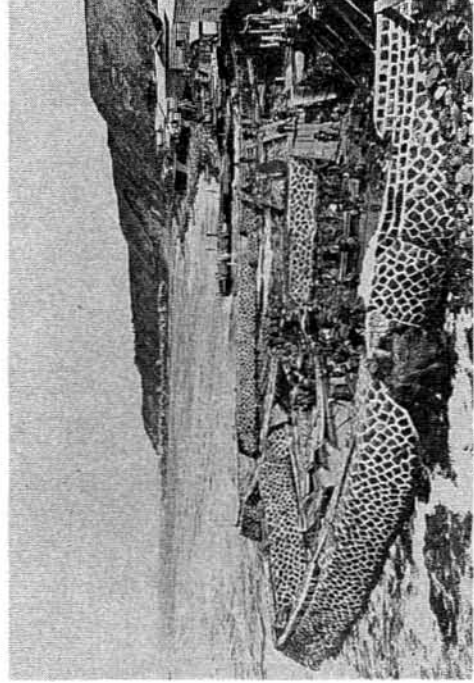


写真6 鱈漁時代の平田の袋洲

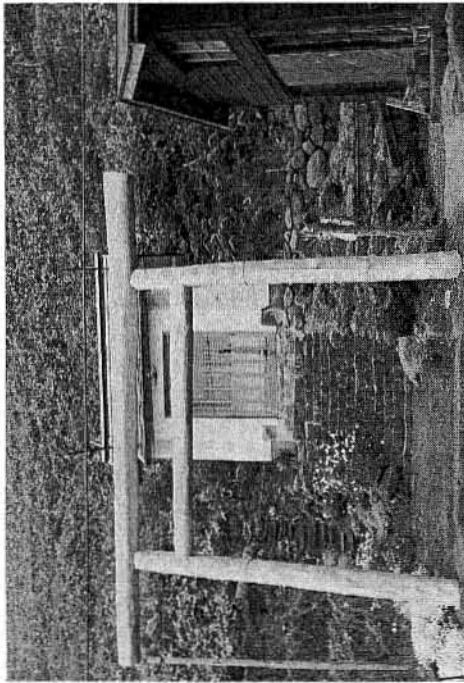


写真7 久連神社

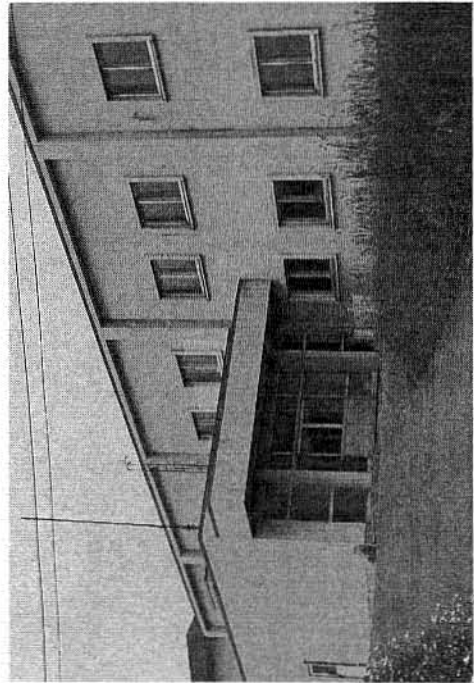


写真8 久連小学校

大正五年大久連部落人家分布図

